平成２８年度
北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業に係る
点検・評価報告書

北海道農政部農村振興局農村設計課

Ⅰ　点検・評価について

１　点検・評価の対象地区

北海道中山間ふる里･水と土保全対策事業の地域活動支援事業の実施活動地区のうち、平成２８年度に事業を完了した次の２地区。

（１）鶴居村鶴居地区

（２）日高町里平地区

２　点検・評価の方法

毎年度事業実施地区を訪問し、事業の進捗状況の確認や関係者へのアドバイスを行っている北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員からの意見や、活動団体、関係町村及び（総合）振興局を対象としたアンケート調査結果を基に、道が評価。

３　北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員

所　　属	職　名	氏　　名	備　考
北海道土地改良事業団体連合会	常務理事	雨山　実	
NPO 法人北海道食の自給ネットワーク	事務局長	大熊　久美子	
フードライター		小西　由稀	
北海道大学大学院農学研究院	准教授	小林　国之	
北海道大学大学院農学研究院	講師	山本　忠男	座長

（氏名五十音順）

Ⅱ　鶴居村鶴居地区に係る評価について

１　鶴居地区の活動内容について

（１）　地域及び活動団体の概要

本地区の鶴居村は、明治 18 年、釧路市から移住した 27 戸が農業を始め、昭和 12 年に現在の釧路市阿寒町から分村し誕生した。釧路総合振興局管内のほぼ中央、雄阿寒岳東南の山麓に位置し、東西に 23 ㎞、南北に 42 ㎞、面積は 572 ㎢、人口約 2,500 人、世帯数約 1,000 戸の村であり、東は標茶町、西は釧路市阿寒町、南は釧路市と釧路町、北は弟子屈町に隣接し、阿寒カルデラ外輪山を貫流する雪裡川、幌呂川、久著呂川の流域に広がる雪裡、幌呂、久著呂の３原野で構成されている。

気候は冷涼であり、夏季は釧路沖で発生する海霧（ガス）に時折覆われることはあるが、内陸型気候により比較的温暖な日が続き、冬季は雪が少なく、晴天の日が多い。

酪農業が村の基幹産業であり、90 戸の酪農家が約１万３千頭の乳牛を飼養している。法人化による大規模経営と畜産環境のクリーン化が進められており、乳質コンテストでは幾度と日本一に輝き、良質な牛乳を生産している。村内で生産された良質乳を使用したナチュラルチーズ「鶴居」は、中央酪農会議主催のオールジャパンナチュラルチーズコンテストにおいて、初出品から最高賞の農林水産大臣賞を含む５大会連続受賞を果たしている。

鶴居村は、天然記念物タンチョウの貴重な生息地であり、欧州にも引けをとらない豊かな自然や美しい農村景観を有しており、平成 20 年には「日本で最も美しい村連合」に加盟し、現在 63 を数える他の加盟町村・地域と美しさを競っている。

平成 16 年に、村民との交流を目的とした農村観光推進団体「鶴居村あぐりねっとわーく」が農業者を中心に発足し、農家民宿、酪農体験、修学旅行の受け入れなどを行ってきた。平成 19 年には地域一帯となった取組に移行するため、鶴居村観光協会内に「地域づくり型観光調査研究委員会」を設置し、魅力的な地域づくり型観光のメニューづくりなどに取り組んでいる。

このように、産業や地域資源を活かした観光振興が進められている一方、村民の暮らしをベースにした取組も必要ではないかという考えをもつ、子育て世代中心の女性グループやグリーンツーリズムを実践している酪農家、商工業者の青年グループなど 10 名が集まり、「鶴居スローライフ実行委員会」を平成 24 年４月に設立した。鶴居の牧歌的な風土を活かした「ここだからできるスローライフ～鶴居型スローライフ」を標語に、鶴居らしい食の発掘・開発、美しい景観などを体感するためのウォーキングなどのメニューづくりに取り組みながら、鶴居独自の食の提案としてワインの開発なども手がけてきた。これまでに実行委員会では具体的な活動内容を検討し、活動を実践する段階にあった。

（２）　活動の推移

活動事項	年度	活動状況
1　フットパスの取組	26	・北海道大学の学生達とワークショップの開催、コース設定の検討とコース整備の実施（６月）参加者数：15 名（学生 6 名、村側 9 名） ・村民を対象とした健康ウォけーキングにフットパスコースを取り入れ、村民との意見交換会の実施（10 月）参加者数：35 名 ・ワークショップの開催（10 月）講師：北海道大学大学院小林国之助教　参加者数：８名 ・村民を対象としたフットパス講習会の開催（11 月）講師：タンチョウコミュニティ代表　音成邦仁氏　参加者数：20 名
	27	・新たなフットパスコースの設置と看板の整備（８月）第２コース「村民の森コース」 ・ガイド（コース案内）養成講習会の開催（８、11 月）講師：和田正宏氏、音成氏　参加者数：延べ 55 名 ・フットパス運営に関する勉強会の開催（８月）講師：和田氏　参加者数：延べ 35 名
	28	・フットパスによる村民交流（６月）講師：和田氏　参加者数：12 名 ・つるいフットパスガイドブック作成（８月）2,000 部 ・フットパス看板作成（９月）
2　地元食材を活用した取組	26	・村民を対象としたヨーグルト料理教室の開催（６月）講師：服部佐知子氏　参加者数：９名 ・納涼祭りでのヨーグルト料理の試食会の開催、参加者数 200 名、アンケート調査（100 名）の実施（７月） ・盆踊り大会でのチーズの試食会の開催、参加者数 150 名、アンケート調査（100 名）の実施（８月） ・地域食をテーマとした講演会の開催（８月）講師：慶應義塾大学　林美香子特任教授　参加者数 150 名 ・地域食を学ぶ学習会の開催（12 月）講師：釧路短期大学　岡本匡代准教授　参加者数 25 名

	27	・食品加工やデザイン包装等に関する勉強会の開催 （11 月）講師：黒井理恵氏　参加者数：35 名 ・地元食材を活用した試食会・料理教室の開催 （７、８、９月）講師：服部氏　参加者数：30 名（各 10 名） ・地域特産品による交流会の開催（１月） 講師:いいね！農 style 編集部　伊藤新氏　参加者数：50 名
	28	・料理講習会の開催（11 月） ヨーロッパのお洒落な地産地消を学ぶ 講師：vera KARAKIDO、服部氏　参加者数：延べ 40 名
３　安全安心な暮らしにおける有機栽培等の取組	27	・生ゴミを活用した肥料づくり等の講習会及び実習会の開催、土壌菌の繁殖状況の確認（６月～11 月） 講師：佐藤美千代氏、菅井まゆみ氏　参加者数：30 名
	28	・生ゴミ堆肥を使用した花の育成実験（10 月） ・地域食と有機栽培等活動小冊子作成（３月）3,000 部

【活動状況写真】

平成 26 年度

フットパスワークショップ（10 月）

地域食をテーマとした講演会（８月）

平成 27 年度

フットパス看板設置（８月）

ガイド養成講習会（８月）

ガイド養成講習会（11 月）

フットパス運営に関する勉強会（８月）

ホエーによる菌の繁殖を用いた実習会（６～11 月）

土壌菌の繁殖状況の確認（６～11 月）

平成 28 年度

フットパス交流会（６月）

フットパスガイドブック作成（８月）

スローライフパンフレット作成（３月）

料理講習会（11 月）

（３）　活動への委員会の助言と反映状況

①　委員会からの主な助言内容

・　新製品の開発というのは外に向けての行動であることから、それは２年目以降として、１年目はもっと村内に向けての普及活動を行ってはいかがか。

・　村全戸にある光ケーブルの端末を使って、講習会のレシピを流すなどしてはどうか。

・. 移住者が多いため、同じ村民でも意識が全く違うことから、地域全体を巻き込んで欲しい。

・　フットパスについて、村民デーを設けて村民は無料で参加できる日を設けてはいかがか。

・　農協の採草地だけではなく、魅力的な牧草地は村内にたくさんあるはず。フットパスのコースをもっと増やしてみてはいかがか。

・　今後は鶴居村内だけではなく、活動範囲を村外に広げ、女性の視点を広げる活動を行ってはいかがか。

・　現在の堆肥作りの活動は、まだ家庭菜園の範疇であり、もっと広く展開していく必要がある。ホエーの利活用を目指すなら、例えば実行委員会が中心となって、村民がホエーを入手できるシステムを確立してはどうか。

②　委員会の助言の反映及び効果

・　地元食材を活用した取組として、１年目は学習会、講習会、ヨーグルト料理教室、ヨーグルト・チーズ試食会及びアンケート調査など村内を中心とした普及啓発などの取組を行った。また、２年目以降、食品加工やデザイン包装に関する勉強会、商品開発、地域特産品による交流会、小冊子の作成を行い、「地域食」に対する村民の関心が高まった。

・　フットパスコースを利用した「村民健康ウォーキング」や意見交換会を実施した。村民からは、「こんな所があるなんて知らなかった。」、「一般参加者との交流が良かった。」という意見があった。

・　「フットパス郡構想」として、２８年度現在開設している４コースに加えて、新たに３コースを開設し、観光客及び村民の憩いの場としての利活用を予定している。

・　村に隣接する標茶町、弟子屈町に地域で女性が活動しているグループがあり、今後連携した活動が可能かどうか検討したい。

（４）　目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
１　フットパスの取組 （ア）コースの整備 （１）新設２コースの設置 （２）降雪期を除いた常設運営 （３）年３名程度の案内ガイドの養成 （４）運営など具体的な取組手法の習得 （イ）フットパスによる地域づくり （１）住民活動の活発化と新たな発想の創造 （２）定期的な軽イベントの開催 （３）初年度参加者目標500人 （４）企画運営などの問題点の把握・整理	（１）「村民の森コース」(H27)、「鶴居市街散策コース」(H28)、「タンチョウの郷コース（下雪裡地区)」(H28）の３コースを設置した。 （２）「村民の森コース」と「タンチョウの郷コース」は、降雪期を除いた常設運営を可能とした。 （３）ガイド講習会を開催し、３名のガイドを養成した。 （４）勉強会を開催し知識の向上を図った。 （１）村民との意見交換会やワークショップを開催した。 （２）フットパスコースを利用した村民健康ウォーキングや村民との意見交換会を開催した。 （３）初年度約500人がフットパスを利用した。 （４）村民との意見交換会やワークショップを開催した。
２　地元食材を活用した取組 （ア）料理・食品の開発 （１）スキルアップ （２）各年度１品の食品開発 （３）完成度の高い食品開発 （４）商品化に向けた具体的な取組手法の	（１）講演会、学習会、勉強会を開催し、スキルアップを図った。 （２）～（４） ホエーパンとホエードリンクを商品化した。

習得 （イ）地元食材を活用した地域づくり （１）販路開拓につながるＰＲ活動 （２）「レシピ」の配付によるスキルアップ	（１）祭りでのヨーグルト料理の試食会・アンケート調査などを実施し、「地域食」に対する村民の関心を高めた。 （２）ヨーグルトを使ったレシピ集を村民に配付した。
３　安全安心な暮らしにおける有機栽培等の取組 （１）有機栽培技術の向上 （２）安全安心な地域食の普及	（１）ホエーを用いた土壌菌の繁殖実習会を開催し技術向上に努めた。 （２）肥料づくりの講習会を開催するとともに、有機栽培の活動をまとめた小冊子を作成した。

２　鶴居地区の活動の評価について

当該地区の活動を、① 活動の状況、② 活動への支援体制、③ ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性という３つの視点に基づき評価する。

①　活動の状況

当地区は平成２４年４月に設立した「鶴居スローライフ実行委員会」を中心に、地域特性や風土を認識し、地域への愛着を育むために、フットパスや地域食に関わる活動を通じて、鶴居村ならではのライフスタイルを村民や観光客に広く提案し、交流を深めることが目標であったといえ、この目標は概ね達成されたと評価される。

主な活動は、フットパスの活用と地域食に関わるものであった。フットパス活用では、鶴居らしい景観を体感するためのコース設定やガイドの養成、ガイドブックの作成を行うなど、地域資源の認識を高める一助になったと考えられる。またフットパスを活用した村民交流も実施され、着実な進展が見られた。

地元食材を活用した地域食への取組では、地元食材を活用した試食会・料理教室を開催するとともに、ヨーグルトを使ったレシピ集の町民への配布がなされた。

また、生ゴミを活用した肥料づくりなど循環型スローライフを PR するパンフレットを作成したことも評価される。

②　活動への支援体制

役場、観光協会、ＪＡなど関係機関・団体との連携を重視し、活動が進められてきた。フットパスの活動から始まり、食をテーマとした活動に拡大することで、活動を

行っているメンバーの裾野が広がった。さらには町外の地域づくり団体と積極的な連携を行うことで、鶴居村から釧路湿原周辺の流域全体での活動、根釧地域の地域づくりのトップランナーとして町外の団体の活動支援へと順調に拡大している。

③　ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

本事業の目的達成の可能性は高いものと考察される。

フットパスコースが複数整備され（本事業を契機に新設コースも計画されている）、一定の参加者の定着が図られている。村民の健康増進と観光客を対象としたフットパスのコース整備・新設は地域資源の（再）認識に繋がるものであり、今後の活用がますます期待される。一方、本活動団体が主体となってフットパスコースを維持管理していくことが望ましいと思うが、将来の維持管理を含めて村の観光協会に引き継がれることは、地域住民の財産を行政関係団体で管理するというあり方に先鞭をつけたとみなすこともできる。

次に、地元食材を活用した地域食においても単なる食材の活用でなく、ホエーを活用した有機肥料の作成という土作りや有機栽培からはじまり、チーズやヨーグルトを広く活用したメニュー開発など、資源循環・スローライフの概念に基づく地域食の開発やその発信などが進められていることは極めて高く評価できる。

今後は、フットパス、地元食の販売、会費等から活動継続のための資金を得る運営に期待するとともに、鶴居村内から釧路管内へ農山漁村の女性の活動の輪を広げたいという目標達成に向けて、地域のトップランナーとしての弛まない活動・情報発信に期待するものである。

Ⅲ　日高町里平地区に係る評価に係る評価について

１　里平地区の活動内容について

（１）　地域及び活動団体の概要

本地区は、北海道日高管内の西部に位置する日高町（旧門別町）と新冠町の２町にまたがっている日高町立里平小学校の校区を区域としている。

地区は、日高町の中心街から北東約 45 ㎞、新冠町の中心街からは約 45 ㎞北側の山間に位置し、秋には鮭の遡上が見られる里平川が流れ、最上流に落差 25ｍの里平大滝、その背後には登山愛好家に人気の里平山（標高 1,291ｍ）がそびえる自然豊かな中山間地域である。

「里平」はアイヌ語の「ri pira」が語源であり、「高い・崖」を意味している。

地区の人口は約 70 人、世帯数は約 20 戸で、産業は農業が中心である。川沿いでは米、ピーマン・きゅうり・じゃがいもなどの野菜類やメロン・西瓜の果物類を作付し、山側では乳牛・肉牛が育てられている。

昭和 24 年に開校した里平小学校では、平成９年度から山村留学により児童を受け入れており、地区の全戸が山村留学推進協議会員となっている。地区の農家が里親となり、延べ 46 名の留学生を迎え入れてきたが、平成 27 年度の地元児童数は５名まで減少し、平成 30 年３月をもって、同校は廃校となることが決定している。

年々、集落の高齢化・人口減が進む中、平成 23 年度、農業者６名が「里平地域活性化協議会」を設立。農林水産省の食と地域の交流促進対策交付金事業を活用し、食づくりと環境づくりの両面から都市と農村の交流促進や地域活性化を模索してきた。

この活動は２年間続き、地域活性化への契機となったものの、具体的な活動方針が定められていないことや、住民それぞれの意識の相違等から、会員以外の地域住民の本活動への関わりがなく、地域全体としての活動となっていないなどの課題が浮き彫りになった。

その後、平成 26 年度に「りびら食楽カモミールの会」を設立。趣旨に賛同する地域のメンバーと地域食材を使用した加工品や調理方法等を開発し、提供することにより、地域活性化と持続的な集落形成の実現を目指すこととした。

（２）活動の推移

活動事項	年度	活動状況
食の開発・販売	26	・美瑛町の廃校利用レストランビブレへ先進地視察（６月） 参加者数：６名 ・料理研修（12 月） 講師：新冠町リストランテアンジェロ　シェフ野村忍氏 参加者数：４名 ・こうじづくり研修（３月） 講師：高橋こうじ店　高橋好子氏　参加者数：５名 ・東川町の平田こうじ店へ先進地視察（11 月） 参加者数：６名 ・食に関する勉強会開催（３月） 講師：フードライター　小西由稀氏　参加者数：13 名
	27	・こうじづくり勉強会（10 月） 講師：北大農学研究院名誉教授　浅野行蔵氏　参加者数：13 名 ・こうじづくり指導（11～１月） 講師：高橋氏　参加者数：４名 ・こうじ小屋の移設作業（２～３月）
	28	・こうじ小屋の移設作業（10～11 月） ・こうじ商品のＰＲパッケージの作成（11 月） ・こうじづくり研修（12 月） 講師：高橋氏　参加者数：６名 ・こうじ販売に関する講演会・意見交換会（２月） 講師：フードライター　小西由稀氏　参加者数：22 名

【活動状況写真】

平成 26 年度

先進地視察（11 月）

こうじづくり研修（３月）

平成 27 年度

こうじづくり勉強会（10 月）

こうじづくり指導（11～１月）

こうじ小屋の移設作業（２～３月）

平成 28 年度

こうじづくり研修（12 月）

こうじ販売に関する講演会・意見交換会（２月）

（３）　活動への委員会の助言と反映状況

①　委員会における主な助言内容

・　里平御膳やこうじなど食に関わることや工芸・手芸など、活動への興味が多岐にわたっているが、目標を一つに絞ることが必要。具体的に計画できないものは見送るなど、途中で投げ出さず、まずは一つひとつを着実にやり遂げる成功体験が必要では。

・　活動を地域に伝わるこうじづくりの伝承に絞ったのであれば、まずはこうじを確実につくれるようになる、次は販路拡大、次は商品開発と、順を追ってステップアップすべき。

・　里平御膳など地域食メニューを開発したとしても、それを地域の行事など、地域の人が集まるところで試食等をするなど、地域を巻き込む発想を持たないと、地域の食としては定着しない。

・　メンバーが全ての作業をみんなでやる、ということは、作業に責任者がいないということ。こうじ製造、販路拡大、商品開発とそれぞれに担当者を置いて責任を追うことが必要では。

・　地域の野菜とこうじをセットにし「漬物づくりセット」として販売したり、こうじを活用したレシピなどを付してこうじを販売するなど、地域のファンになってもらえるリピーターを増やすことが必要。また、地域のこうじづくりを引き継いだ思いなどを顧客や地域の人に知ってもらうための取組を行っては。

②　委員会の助言の反映及び効果

・　事業開始当初は、里平御膳メニューの開発やこうじづくりなどの地域食開発、工芸・手芸等の地域性を活かした活動等、活動目標が多岐にわたっていたが、メンバーが６名と少数で活動していることから、活動目標をこうじづくり一つに絞り、事業を行った。

・　平成 28 年度にこうじ小屋の移設が完了し、こうじについては商品化し、販売を開始した。販路拡大や商品開発については、まだ達成していないが、来年度以降取り組む予定である。

・　地域の人に向けての地域食の意見交換会（試食会）を開催した。こうじづくりに関して新聞等メディアを通して発信しており、今後も引き続き発信予定である。また、こうじづくりを引き継いだ思いをパンフレットにし、顧客等に配付している。

（４）　目標の達成度

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
１　地域食材に関する活動 （１）こうじ小屋の移設によるこうじづくりの拠点設置 （２）里平御膳開発作業の拠点づくり （３）里平御膳のレシピづくり （４）こうじ及び里平御膳商品化に向けた具体的方法の確立 （５）販売手法及び販売方法の確立	（１）こうじ小屋を移設し、こうじづくりの拠点を設置した。 （２）～（５） 「里平御膳」（地域食）については、里平ボウル等の開発は果たしたが、地域への普及、商品化や販売への具体的展望は見出していない。 こうじについては、商品化し、平成 29 年２月６日から販売を開始した。
２　情報発信に関する活動 （１）広報誌、インターネットを活用した活動内容の情報発信 （２）地域内外での行事等への参加、こうじ料理等の試食会の開催	（１）こうじの販売開始について、新聞記事（２社）、インターネットにて情報発信した。 （２）平成 29 年２月、地域住民などとこうじや地域食材を活用した意見交換会（試食会）を開催。今後、地域内外でのイベントへの参加を計画。

２　里平地区の活動の評価について

当該地区の活動を、①活動の状況、②活動への支援体制、③ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性、という三つの視点に基づき評価する。

①　活動の状況

当地区は、平成 23 年度に農業者６名が「里平地域活性化協議会」を設立し、国の交付金事業により、食づくりと環境づくりの両面から２年間にわたり、都市と農村の交流促進や地域活性化について模索した後、平成 26 年度、食を核とする活動を行う「りびら食楽カモミールの会」を設立し、本事業の対象地区となった。

当初は、こうじと地元食材を活かした「里平御膳」や同御膳を設えるための手芸・工芸など活動の項目も多岐にわたり、その実現への具体的な計画は十分なものでなく、活動の主体性にも欠ける状況にあった。

事業２年目以降は、目標を地域で作られてきたこうじの伝承に絞ることで活動の目的と内容が明確となり、最終年はこうじ小屋が完成し、老舗こうじ店の「技術」と「味」を引き継ぎ、こうじの製造・販売が開始することができたことから、本地区の活動は一定の評価ができるといえよう。

② 活動への支援体制

日高町、新冠町など行政の支援体制は地域の事情もあり希薄だったように思える。

そのような中、本委員会委員が数回にわたって現地に入るなど、他の採択地区以上に委員会はじめ関係機関の協力が必要とされた。このことは否定的に捉えることもできるが、この地区の活動がここまでこられたということは，周囲の支援体制が十分にあったと評価することもできる。

本事業の終盤ではあるが、こうじという活動の主軸が具体化して以降、行政や関係機関、地域内での協力・支援の輪が少しずつだが広がってきたことも書き添えておきたい。

③ ふる水事業の目的（趣旨）達成の可能性

地域資源の活用という面では，地域の伝統的なこうじ造りを継承し、販売まで漕ぎ着けたという点では評価ができる。また、これまでの料理研修の成果を生かし、購入者にこうじを使った料理レシピを配布するなど、付加価値につながる活動にも積極的である。

一方、地域活性化に強く結びついているかという点では、一層の努力を期待したい。活動内容自体を地区内の住民に広く知らせるという活動が十分ではなかったため、また当初の活動内容が多岐に渡りわかりにくかったことも、結果として会員の広がりが遅れた要因であろう。ただ、こうじという核により、地区の活性化に向けた（再）スタートが切られたともいえよう。さらなる活性化に向け、地区の農産物を生かしたこうじ商品の開発、こうじを通した地区の魅力発信にも期待したい。

今後の課題は少なくない。こうじの販売期間が農閑期に限られているため、情報発信を如何にしていくか。販売の安定を如何に図るか。少人数の会員をどう拡げるのか。道内では珍しい生こうじという特徴を生かし、当活動団体として「こうじのブランド」の確立を目指し、地域の理解の醸成を図りながら、次のステップへチャレンジすることを期待するものである。